

〔假名曆註解〕二百十日 立春ヨリ二百十日メナリ、秋風烈キ時ナリ、カクノ如ク注シテ、民ニ五穀ノ用心ヲイタサシムル也。

〔俳諧歳時記 七月〕二百十日 立春の日より二百十日め也、この頃社の最中にて、金氣殺伐の氣變動する也、故に必風雨あり、この節中稻の花ざかりとす、農民その花を損はんことをおそる、又二百廿日は晩稻の花盛とす、

〔改正月令博物筌 七月〕二百十日 立春より二百十日めをいふなり、今日の風を恐るゝは、二百十日は早稻の花ざかり、二百廿日は中稻、二百卅日は晩稻の花盛り也、是より後は花ちり實になるゆへ、風吹ても稻にさはらず、稻の花は中に水の如き白きものあり、是米になる也、風ふけば、此水を吹ちらすにより、米出来ざるなり、雨ふれば、此水を花にてつゝ、むにより、風ふきてもさほどに害をなさず、雨なしの大風を恐るゝ也、東北より吹を、大坂にて上げといふ、此風吹つれば、ひえてまけになり、西より大風にて吹もどすにより、是をきらふ、東南の風をいなさ、或はいせこちと云、あた、かなれども、是もふきつのれば、大まけになる、すべて東より吹風は、雨にならざれば、西より大かせにて吹もどす、雨になれば、さほどの事なし、大形は雨になりておさまる也、西北より吹を、あなせといふて日和よし、西南を沖氣といふ、曇りてむしくすれども、日和つゞくもの也、まかれどももしふり出せば、此日和は長きものにて、西より晴てくるかとおもへば、沖より雲をつきのぼして雨になる也、此風吹つゞけば、日和も曇りも、雨も、とかく長くつゞくもの也、申酉の方より吹を、ませといふ、日和つゞいてよし、東より吹こみ、西より吹風に、わいたといふ風あり、此風は地へふきつけて、其所より風次第にわきいづることく、大風になり、稻を損ずる事甚し、雲ありて北方は雨をつかさどる、歌にも秋北とよめり、秋は金なり、北は水也、金生水の理にて雨を生ずる也、まかれども夜晴て北風は日和よし、